

## スキート技術の世界的システム化の波

時を経る度にスキートのルールは改正されてきた。  
標的の飛距離増加は当然の如く行われ、難度を上げる為の様々なアイデアが出され、今やスキートは、ステーション オール ダブルス にまでなり、あまつさえ、3番・5番射台では、それぞれマーク・プール、プール・マークの両方向のダブルまでセミファイナルとメダルマッチのみではあるものの採り入れられている。

なぜこうまでしなければならなかったのか、ISSFのさるテクニカル コミッティ (技術委員会) の人との話の中にこんなコメントが出てきている。

「現在は競技標的数が少なくなり、その全部を得点にすることが当たり前と云う観念の下に各国の競技態勢はある。」

スキートに於いてはこの傾向が特に強く、ルールの難度を上げて行かねば、終いにはアメリカンスキートのように競技数全部にストレート (満点) を挙げる選手が多くなり決着がつきにくくなってしまう。

競技の発展と云う観点から良い記録を出す選手が多数輩出されることは良い事なのだが、世界的に射撃レベルが向上して来ている現在、競技技術、競技精神ともに困難なものに立ち向かわなければならぬ競技現実でないと競技は成立して行かない」

「出現して来る良い選手達の鼻をあかしてやろうとか、高得点は絶対撃たせないとか言うものではなく、難度を上げるのは競技現実の維持とそれに取り組む各国選手の競技力向上のためと考える・・・理解してもらえるかな」

### 世界のスキートに於ける技術的輸出入

スキートの第三世界が出現している。  
それは技術のある到達点でもあろうし、スキート技術が世界的にシステム化して来た現在のスキート世界である。

言葉を換えれば、スキート射撃技術のスキート世界での富裕層 (国) と貧困層 (国) に分かれてしまい、そこに新たな第三世界とも言える第三スキート勢力が派生した。第三スキート勢力は1か国にとどまらず複数国に及び、その数は更に増加傾向を示している。

そのようなスキート現状をもたらしたのは、スキート技術の輸出と輸入であった。

アメリカ、イタリア、ロシア、ドイツ、フランスなどの国々から、ヨーロッパ、南米、中近東、ユーラシア、アジアの国々に向けてスキート技術が輸出されたのである。

1991年ソ連邦崩壊後、旧ソヴィエトの選手たちはそれぞれ自分の出身国へと戻り、いち早くスキート技術の輸出を開始した。

アゼルバイジャンのティモキンが現役ながらクウェートにスキート技術を輸出し始めたのをきっかけにソコロフなど当代の一流現役選手達も輸出に加わったのが既に22年ほど前の事である。

それらは東欧にも輸出され、チェコやスロヴァキアなどは輸入技術によって射撃力を以前に増して高めていった。

アメリカのスキート技術の輸出は昔からで、その意味では先駆者でもある。特に南米諸国、そしてアジアの自由主義国、タイ、フィリピン、韓国などへその技術を輸出している。

イタリアも射撃銃、装弾の輸出ばかりか、射撃技術の輸出も盛んに行われるようになり、その先駆けが、トニーノ ブラッジ によるキプロスへの輸出であった。

ブラッジは、エンニオ ファルコ を育成したコーチである。

既に30数年前、ロマーノ ガラニアーニがルーマニアにそのスキート技術を輸出してルーマニアはイトマンらの国際的選手を輩出している。

イタリアはスキート、トラップともに技術輸出を行い、アラブ諸国からインドなど西アジアにも及んでいるし、近隣のスロベニア、クロアチアからデンマークにまで及んだ。

中国は30年ほど前だったか、ドイツから ウインヒア を召致しスキート技術の輸入を実行している。

世界の競技舞台で競っていたスキートのトップを形成する国々からのスキート技術輸出と輸入国の輸入実績は、世界スキート社会の競技様相を大きく変えていった。

そうした世界のスキートの潮流の中にあって、輸出は云うに及ばず輸入も行われず、世界スキート社会から唯一孤立無縁であり続けているのが本邦、日本なのである。

過去には日本もアジアクレ射撃界の頂点に位置していた時期はあったが、それはアジア射撃諸国の競技態勢がまったく整えられていない途上期にも達していない頃の事である。

日本のスキートの歴史の中にも優秀な選手・射手の存在は認められるが、それは一個人の才能として存在したのみで、それが国としての競技力に至ってはおらず、平均的

な射撃技術として根付いてきたものでもない。

江戸幕府の大政奉還から数百年の時を経た今も、ことクレール射撃に於いては鎖国に類似した状態が続いて来ている。

諸外国のスキートを手放しで賞賛するものではないが、少なくとも世界のステージに於いて日本はそれらの国々に大きく距離をおかれ、比較対象にすらならないスキート現実があることを認めざるを得ない。

本邦に輸出可能なスキート技術などあろう筈もないが、輸入を行おうと思えばそれは可能な状況にあると想われ、スキート技術の輸入が出来る、出来ない、と云う現実的側面より、射撃の思想、思考的土壌が整っていないのが本邦の現状ではないかと察する。

スキート技術を輸入して実績を上げた国々を紹介しておこう。

エジプト、キプロス、ギリシャ、クウェート、カタール、UAE、スロヴァキア、チェコ、ポーランド、タイ、韓国、中国、スイス、ペルー、チリ等など、他にもあるようだが確かなのはこれらしか知らない。

そして、とりも直さずスキートの第三世界を形成しているのはこれらスキート技術の輸入国なのだ。

アメリカ、イタリア、フランス、ドイツ、旧ソ連の国々、スペインなどに第三世界のスキート勢力が加わり、スキート競技世界は、どこの誰が勝利するのか実に混沌としており、何処の誰が勝利しても不思議ではない競技現実下にあるのだ。

どこの誰が勝利しても不思議ではないのだけれど、もし日本が勝利したなら、それは一大事、大層不思議な事として世界の耳目を引くに違いない。

それほどに日本のスキートは、世界スキート社会のサークルの外に位置してしまっているのである。

## 世界の射撃界から眺めた日本

世界と云ったところで、全世界を指しているものではなく、あくまでも筆者の知り得る限りの諸外国からの眼差しである。

誤解や批判を恐れず申せば、射撃における日本は世界の最たる後進国であり、世界射撃界の田舎者と見られているようだ。

バブル崩壊後、低迷した経済の低成長を引きづって今日に至っている本邦だが、世界の射撃界から見ると、日本は経済的にも文化的にも富裕な国に世界規模では位置づけられている。

無論、彼らは日本の射撃現実など知らないし、射撃にまつわる経済状態や循環などは全く知りようがない。

従って、一般論として諸外国人が知り得る日本を基に射撃に於いても語るのだろうが、語られるそれらは、不思議や疑問一色になって語られる。

VW、BMW、メルセデス、ポルシェのドイツ車にはじまり、フランス、イタリア、スウェーデンの車、英国車、果ては、ロールスやベントレー、マゼラッティ、フェラーリ他、多くの高額外国車が輸入され、それらを好んで乗る人々が多くいると聞こえてくる、と彼らは云う。

「日本には優秀な車が沢山あるじゃないか、トヨタ、マツダ、なんか最高だし、ホンダも面白くて良い車だよ」

射撃選手や射手には、どうした訳か、クルマ好きが結構多くいて諸外国でもそれは同じようだ。

遠の昔にスキートの現役を引退したドイツの知人が語った。

「マツダ6（アテンザ）に乗っているけど、素晴らしい車だぜ。日本では、BMW 3や5、メルセデスのCやEの方が良い車で高級だと考えられているらしいが、とんでもない、自分の国の優秀な車を見落としているのじゃないのか。

外国の車を好む連中が少なくないなら、射撃の技術に関しても外国の良い技術を輸入して射撃力の増進に取り組めばいいのに・・・・・・難しいかね？」

「俺は今、新しいヤリス（トヨタヴィッツ）を日常の足にしているけどさあ。

すげえーイイよ。ヨーロッパのスモールコンパクトと比べてなんの遜色もないし、室内空間なんてむしろ広く感じる・・・イイね。ところでさあ、日本はどうして射撃技術の輸入をしないの？クルマなんかはたくさん輸入しているのにね」

と云ったのはイタリアナショナルチームのフィジカルトレーナーであった。

ある選手の言。

「俺、日本で開催された千葉と熊本のワールドカップに2回行ったけど、豊かな国だと感じたよ。

射撃場そのものは射撃実際の面でお世辞にも最高とは言えないけど、宿泊施設や食事は清潔感があるし、人々も親切でいろいろ気を遣ってくれているのが分かる。

経済的にも平均的に豊かなんだろうなと云う感触を持ったよ。

けどね、射撃に関しては豊かさを感じられなかった・・・・どうしてなんだろう。

射撃方法の違いは分かるけど、人種でそれほど違ってしまうものでもないと思うんだけど。

まあ、世界の平均的と云うか、標準的な射撃要素が極端に欠けている射撃だとは思わね・・・日本の射撃は！？」

「日本は近隣の国と練習をしたり競技を行ったりしないの？　陸続きじゃない島国だから難しいのかネエ。

ヨーロッパなんかは、国と国が隣接し合っているから、しょっちゅう射撃で往き来していて、日本で云うなら隣りか近くの県へ射撃に行くような感じだね。

だから、射撃技術の輸出だ、輸入だ、と云うまでもなく技術交流が自然派性する訳だ。そんな土壌があって、射撃技術の増進、向上が自然に図られていると思う。　そういう地理的条件に日本がないならば、条件を自ら整えて行かねばならないのが日本の射撃界に課せられた課題じゃないのかなあ。

孤立無縁の単独で射撃を行っている現実、日本の射撃にどのような効果をもたらしているのだろうか？　世界の競技現場で公開できないような秘密が隠された驚くべき優れた射撃なんだろうか？　それとも射撃に関しては、射撃団体も個人も、体裁だけ整えられたような表面的な体質にあるだけなのかなあ、あるいは射撃そのものが遊びの域を抜け出ていないと云う事かもしれないね」

と云ったのは、アテネ オリンピックのメダリストで一国のナショナルコーチをしている人であった。

往年のスキート選手に日本のスキート選手で印象に残る選手の話聞いたところ・・・・・・・・

ラスムッセン（デンマーク）オリンピックメダリスト、世界選手権者

「そうだなあ、カットウ（加藤一義氏）かな。　デンマークグランプリで197点を撃ったよ。当時、彼はオートローダー（自動銃）を使っていたんだ。

細身で小さな選手なんだけど、射撃は巧かった洗練されていたね」

ヌリア オルテス（メキシコ）　女子世界選手権者

「タロ アソ（麻生太郎氏）、射撃は巧いという印象はそれほどなかったけど、当てていたわね。　ベニトホワレス（メキシコ国際大会）で196を撃った。

首にスカーフかなんか巻いちゃって、とてもお洒落な印象があったわ。　日本の総理大臣になったようだけど射撃をやっているの・・・まだ？」

スウィンケルス（オランダ） オリンピックメダリスト、世界選手権者

「それを訊かれたら テッドを挙げるしかないだろ・・・巧かった。  
幾度となく一緒に競技をしたし、俺が射撃の質問をして教えて貰ったくらいだからな。  
一度だけ俺が勝ったが、あとは全部負けているよ・・・勝てなかった。  
オランダのヴェルトグランプリで、俺は2日目まで150ストレート、奴は148だ  
った。絶対に勝てると思ったんだが、最終日、奴は50ストレートで、トゥーミス（2  
標的失注）した俺に追いつき、俺は競射で負けてしまった。恐ろしい奴だった」

日本にもこういった選手の存在があったのだが、どうした訳か、それらのスキート技  
術やスピリットが現在に伝達されている、または、教示されている気配は全くない。  
惜しいことである・・・もっともそれらのスキート技術が現代スキートに通用するの  
か否かは判らないのだけれど・・・・・・・・・・。

諸外国選手の眼には、日本のスキートが奇異に映るのは仕方がないことなのか？  
面と向かって口にこそ出さないが、『あんなことやっていて良い訳ないよ。 何考え  
てるのだろ、大丈夫かい！？』と云うのがどうやら腹のうちのようだ。

## 世界的に標準とされる基礎事項の根幹は二つ

1. It is indispensable work of the gun mounting without rotation and movement.
2. Locate target with your eyes before you move your gun.

1. は、 身体ローテーションや銃の移動を伴わない舉銃、据銃は必要不可欠である。
2. は、 標的のロケート（位置の視認把握）を、銃を動かす前に行いなさい。

概ねこのような意味で、この二つは不可欠な基礎根幹事項として学び実践してゆくべ  
きと言われている。

現に世界競技ステージで競う選手達を観てみても、例外的な選手がいないわけではな  
いが、上記2事項の射撃技術としての現れは顕著に観察できる。  
予動を伴う選手でさえも、予動の中に著しい舉銃動作が観察でき、素早く速やかな据  
銃へと連結している。

先のスペイングラナダでの世界選手権の Jr.チャンピオン、ガビィー（ガブリエール  
ロセッティ《イタリア》 / ブルーノ ロセッティの19歳になる息子）は全く予動  
を入れず、ひたすら銃を肩に挙げている。

一般男子銀メダルの アンソニー テラス(フランス)も同様に、素早いガンアップ（撃銃と据銃）の中に標的のロケットを怠らない姿勢が強く窺える。

二人ともブルーノ ロセッティの指導下にあるのだから、まあ、当然と云うべきなのだろう。

最近少々の不調にあるが、とは言っても120～121、2/125くらいは撃つ。しかし、124、125と云う記録が最近出ていないヴィンセント ハンコック(アメリカ)である。

ハンコックは若干の予動を入れるとは云うものの、それは銃先で1～2インチ(約2.5cm～5cm)程度で、傍から見ると、銃が真っ直ぐに肩に挙げられているようにしか見えない。

ハンコックの撃銃も非常に素早く、相当早期に放出された標的のロケットが完了してしまう。

3選手を例に挙げたが、多くの他選手がもれなくこのような傾向にあってスキートに臨んでいる。

どこかの国の選手群のように、標的が放出されるとロケットも為されず標的の飛翔方向に銃先が向いてゆき、銃が肩に付くか付かぬかのうちに撃発されるスキートとは全く異なる射撃性質にあるのだ。

それら外国勢の一連のスキート射撃は、多くの日本選手の思考上に存在するであろう「狙う」と云う言葉に表される、脳裏にある標的への狙点としての前方へ銃を位置させ文字通り「狙う」という感覚と動作を射撃動作中に含ませるものではない。

素早い撃銃、据銃とともに目の前にある現実の標的をロケットし、肩に挙げた銃の安定度の高い移動性を有するムーヴェメントによる標的に対する瞬時の銃の等速移動により、的確な撃破ポイントに銃を位置させ撃破する。

しかもこの一連の動作はすべて自動的に行われ、意識的認識によって標的との撃破可能関係を生じさせるものではないのだ。

意識や認識ではなく、無意識、潜在意識活動として一連の射撃動作を完結する為の大きなベースとなる基礎根幹事項が先に挙げた2事項なのである。

このベースに則ったスキートを行なう日本の選手がいる。

一人は岩手県の村谷選手、いま一人が福井県の中本選手である。

が、彼らはそのようなスキートの練習過程にあり、彼らのスキートは技術的到達点に

は達していない様子だ。

彼らの射撃は簡潔で簡素である。

舉銃が行われ、なんだか標的のそこいらを単純に撃っているだけと目に映る。

射撃にゴチャゴチャ感がない、余計な付加動作が目につかない、当たっても外れても同じ動作が繰り返され、よくよく眼を凝らしていないと成功時の射撃と失敗時の射撃の違いが分かり難いのは諸外国の選手と相通ずるところでもある。

彼らの今後のスキートの向上と活躍に大いに期待したいのは、その成功と活躍の如何によっては日本のスキートにも大変遅ればせながらも — いよいよ夜明けが近づいて来るのか — と云う一片の希望が見られるからである。